

外交史料館報

第 28 号

平成 26 年 12 月

【講演会】

日本とトルコで大使館が開かれるまで—近代外交システムの拡大と日本とトルコの常駐在外公館網の発展—

鈴木 董 (1)

【論 文】

日露戦争への道—三国干渉から伊藤の外遊まで—

黒沢 文貴 (33)

【史料紹介】

田中首相・スハルト大統領会談録—1974年1月15日

服部 龍二 (59)

国際労働機関(ILO)との協力終止関係史料

神山 晃令 (71)

外交史料館所蔵「外交公文」と明治初期外務省の編纂事業

濱田 耕平 (85)

【活動報告】

外交史料館所蔵史料の検索性向上を目指して

(109)

【『日本外交文書』概要】

「昭和期Ⅲ第一巻・第二巻」

(117)

【連携展示】

「地図アラカルト 世界と地域」について

(143)

【特別展示】

「日本とトルコ—国交樹立90年—」について

(149)

【エッセイ】

特別展示「マッサン展」に寄せて

高橋 周平・白石 仁章 (163)

—知られざる歴史秘話と展示に向けた作業の顛末—

【外交史料館ニュース】

(195)

外務省外交史料館

特別展示「マッサン展」に寄せて —知られざる歴史秘話と展示に向けた作業の顛末—

高 橋 周 平

はじめに

外交史料館では二〇一四年九月二十四日より二〇一五年五月八日まで「マッサン展」と題した特別展示を開催している。今回の企画は従来の外交史料館特別展示と比べ、いささか趣を異にしている。その一番のポイントは、NHKの朝の連続テレビ小説（いわゆる「朝ドラ」）。以下、朝ドラとする）で「マッサン」が放映開始されることを意識し、朝ドラ「マッサン」の主人公のモデルである竹鶴政孝（以下、政孝とする）に焦点をあてた展示を組んだことである。そのため、当館所蔵記録を補填し、より充実した展示内容とするためアサヒビール株式会社（以下、アサヒビールとする）などから多数の史料をお借りしたことも、初めての試みであった。

新しい挑戦には試行錯誤がつきものであることに異論はあるまい。

今回の企画にあたっても試行錯誤の連続であった。そして、その過程で得たさまざまな体験を、担当者の間で「よきメモリー」として埋もれさせてしまうのはもったいないのではないか。『外交史料館報』の読者層を考えれば、類縁機関の皆様にとって、多少なりとも将来の展示企画を考える上で参考になるかもしれない。また、研究者の皆様には、今後当館所蔵史料から自分の研究テーマに即した史料を探すにあたり、何らかのインスピレーションを得るきっかけを提供できるかもしれない。そのような考えからまとめたのが本稿である。

本稿は、二部構成となっている。第一部は、今回の特別展示開催の背景、そして実現に向けての経緯などを紹介することとし、高橋が担当した。第二部は、第一部で紹介したコンセプトに即して具体的な展示史料をどのように集めていったかについて明らかにすることとし、白石が担当した。また、「おわりに」は、二人の共同執筆である。

分けて（i）グラバーハウス再建問題、（ii）グラバーバース誕記念行事、
（iii）書道作品寄贈問題があるので、それぞれ簡単に経緯をまとめる
こととした。

（i）グラバーハウス再建問題

市長との会談の後、せっかくアバディーンを訪ねたのであるから、グラバーハウス＝彼が育った家を見学しておこうと思った。ところが、総領事館の運転手が道に迷い、なかなか到着できない。彼は、私の前任者の時に、一度一緒に行つたというのだが、看板も出ておらず、駐車場もないような所なので、結局は何人か現地の人尋ねてようやくたどり着くことができた。

一見、庭つきのやや広めな敷地にある普通の建物にすぎない。午後一時頃着いたのだが、玄関は閉まつていて、人の気配もない。ガラス



グラバーハウス（アバディーン市HP）



グラバーハウスの入り口
(筆者撮影 2004年)

で囲まれた中にある玄関を見ると、驚いたことに壁に大きな穴まで開いていた。これでは、とても来館者を迎える博物館には見えない。中に入ることは諦め、建物の周りを一周して、庭に向かおうとすると、突如建物に灯りがともり、人の気配がして玄関を開ける音がした。中から人のよさそうなスコットランド人が出てきて、「私は管理人です。当館は予約制です。今昼寝をしていたのですが、特別に案内しますよ。」と言つてくれた。中は普通の家に家具や家財が置かれており、壁には日本のカレンダーや書道の作品が所狭しと飾られていた。正直に言つて、グラバーの博物館というよりも、管理人の住居にグラバーの関連品が同居しているという感じであった。これでは、長崎市とアバディーン市の姉妹都市提携までは相当長い道のりになると感じた。

その日のうちにエディンバラに戻り、グラバーハウスの再建計画に向けて私ができることを考えた。再建と言つても当事者ではないので、直接できることは殆んどない。しかし、スコットランド人にトマス・グラバーの存在を知つてもらい、関心を持つてもらうことこそ第一歩であろう。

そのために活用したのがオペラ「蝶々夫人」である。「蝶々夫人」は、直接グラバーを題材にしたオペラではないが、グラバーを取り巻く人間模様をヒントにした可能性が大きいことは指摘されている。私の周りには歌手や演奏家、ストーリーテラー（昔話の語り部）などの仲間がいて、彼らの間ではオペラ「蝶々夫人」の鑑賞会まで実施するほど盛り上がりを見せた。言うまでもないが、私としては機会ある毎に、

グラバーが幕末から明治初期にかけてさまざまな分野で貢献し、明治維新の「影の立役者」と見なされることもあるスコットランド人ということを必ず紹介し続けた。

スコットランド議会の議員の事務所を訪れ、たまたまアバディーン市の出身者であることがわかると、必ずグラバーについて説明し、長崎市との交流促進の話も伝え、環境整備に努めた。

アバディーン市には、グラバーとの関係だけではなく、日本との文化交流に欠かせない人物や団体が多数存在した。その一つが空手協会である。意外に思われるかもしれないが、スコットランドには幾つもの空手協会が存在し、アバディーンに本部を置く空手協会は組織的にも実績面でも非常に充実し、精力的に活動を展開していた。その会長が非常に親日家で、人脈も広く私の仕事に対してもさまざまな形で支援してくれた。アバディーンで空手の大会がある度に私がスピーチする機会も頂戴したほどだ。

そのような活動を展開していた頃、アバディーン市議会でグラバーハウスのための予算が認められたというニュースが届いた。予約制ではなく常時開館体制に改め、説明員も常駐することになったというものであった。

その後グラバーハウスの体制は予算の継続が認められず、元の状況に逆戻りし、更に「閉鎖」の危機にもさらされながら、なんとか今日まで存続している。もともと日本になじみのないスコットランド人にグラバーの功績を理解させ、グラバーハウスまで足を運ばせるのは至難の業なのである。

「マッサン」のようにグラバーを主役にした映画やドラマが作られれば良いのだが、日本の近代化や明治維新に果たしたグラバーの役割に対して革新的な見直しがなされなければ困難であろう。見方によれば、討幕派に武器を売った「死の商人」というイメージを懐く向きもあるので、彼の業績を根本的に見直すことも必要ではないか。

その後、アバディーンを訪問した機会にグラバーハウスにも立ち寄ったが、玄関の壁の穴は修復され、館内には三名もの説明員がいて来館者に対応する体制になっていた。その時の私が懷いた正直な気持ちは、急激な改善が行われても、それが長続きしないことへの危惧で

(ii) グラバー生誕記念行事

グラバーhausの問題とは別に、彼の業績を顕彰するためのイベント実施は、比較的順調に運んだ。



グラバ一生誕記念レセプション
(スコットランド議事堂
2006年 筆者所有)

私もよく知っているアバディーン市選出の議員が中心となり、グラバーの生誕日をスコットランド議事堂で祝うというアイディアである。私はこのアイディアを聞いてその場で全面的に協力することを約束し、こちらからもいろいろアイデアを出した。主催者は提案者の議員とアバディーン市長と私の三人にすることになった。単にレセプションとして人が集まるだけではなく、日本とスコットランド双方の文化交流の場にすることも合意された。日本側にできることとして、長崎市長と長崎のグラバー邸の寄贈者である三菱関係者から祝辞をいただけようお願いすることになった。

そして、グラバーの誕生日である六月六日にスコットランド議事堂の委員会室を借り、スコットランドで初めてグラバーの生誕記念イベントが開催された。当日は、子供たちによる空手演技、琴演奏、クラサック（スコットランド・ハープ）演奏、ハイランドダンスなど多彩な演目のほか、グラバーをモチーフにして出版されたばかりの小説の紹介も兼ねるなど成功裏に終了し、グラバーの生誕記念イベントを毎年開催することでも関係者の間で意見の一致をみた。

翌年の第二回実施に向け、私と議員との間で打ち合わせを重ね、イベントの演目もスコットランド学生による着物ショーをメインイベントにすることで関係者の了解もとれ、準備は着々と進んでいた。ところが、その年の五月に総選挙が実施されることになつており、イベントを推進するメンバーの中には立候補者や選挙関係者も含まれていたため、誕生日当日である六月初旬の開催は現実的ではないとの結論に至つた。そこで、情勢が落ち着いた秋以降、十月頃に延期することとなつた。たとえ、グラバーの誕生日という記念すべき日であつても、開催時期を固定してしまうことによって、長続きしないイベントに終わってしまうよりも、状況に合わせて柔軟に対応することの方が重要であると判断したのだ。

状況の変化はそれだけではなかつた。関係者の間で延期の話が出始めた頃、私自身の帰朝の内示があつた。自分がいる間に出来るだけのことをして、あとは後任者に引き継ぐことにした。八月の下旬に帰国し、その後は新しい職場と第二の人生に向けての準備で余裕もなかつたので、第二回目のグラバー生誕祭がどのようになつたかはフォローできなかつたが、関係者の意欲と努力によりその後も続いていることを祈つてゐる。

（三）書道作品寄贈問題

アバディーン市にはここで紹介したい思い出がもう一つある。最初にグラバーハウスを訪問した時にその中で家具や日本のカレンダーに紛れ、多数の書道作品が飾つてあつたことは前述のとおりだが、

的にはグラスゴウにあるミツ
美術館等での作品展を企画。
石氏にお会いし、了承を得て、
実施することになった。最終

意によりグラバーハウスに保管されていたのだ。

ここでは余り詳細に紹介する誌面はないので割愛するが、その書道家である高橋香



書道作品展（高橋香石氏提供）



作品の贈呈（筆者所有）

その作品が非常にダイナミックだったので、それを活用して何か出来ないかと考えたのである。書道作品が展示されていたのは理由があつた。グラバーハウスを書道の作品展示場として使つていたのだ。私も作品展のオープニングに招かれたのだが、残念ながら、エディンバラでの仕事が入つていたので文化担当官に代わりに出席してもらったことがある。作品展の期日は既に終了していたので、私が訪れた時に見られるとは思わなかつたが、展示会が終わつたにも拘わらず、その作者の作品は管理人の好意によりグラバーハウスに保管させていたのだ。

「手紙には、それぞれの作品はそれまで作品展で展示したもので、将来作品展が行われるときには事情の許す限り作品の提供をお願いすることがあるかもしれない」と書いておいた。私が直接渡すことが出来たある市長などは、非常に喜び、すぐその場で市長室の壁に飾つていただいたこともあつた。私にとつては特に思い出深いアバディーン市の市長にも寄贈したが、非常に喜んでいただき、「最大限活用させていただきたい。」との言葉もいただいた。

その後まもなく最後にアバディーン市を訪問した時である。時間に少し余裕があつたので、アバディーン市の美術館を訪れた。一通り早足で回つていると、何とそこに総領事館から寄贈した書道の作品が展示されているではないか。書道の作品を総領事館の倉庫に保管しているでも展示が出来るようにするという考えもあるが、私は少しでも多くの機会にスコットランドの皆さんに楽しんでいただきたいと考えて、寄贈することを考え付いた。総領事館が買い取り、それを寄贈するなどそれまで経験のないことだつたので心配もしたが、優秀な文化担当官が本省と協議の上実現の運びになつた。一時的なイベントはそ

チエル・ライブラリー（ヨーロッパで最大の蔵書数を誇る図書館）など五カ所で実施した。そして、私が帰国する前に、いくつか作品を追加していただき、全部で三二一の作品を総領事館で買い取つた上で、スコットランドにある三二一の地方の首長に寄贈することにした。出来だけ私が直接手渡しできるようにしたが、時間の関係で手渡せなかつた相手には手紙を添えて寄贈した。

れだけで終わってしまうが、作品が市長室や美術館で掲示されている限り、いろいろな形で語り継がれ、受け継がることになり、その方が間違いなく、より多くの付加価値をもたらすと信じている。ひらめきや創造性については、全く自信のない私であるが、私のアイディアの中では数少ない及第点がいただけるものかも知れない。

その後、私自身スコットランドとは全く関係のない部署で仕事をしてきましたこともあり、スコットランドの現状をフォローする機会も皆無であった。しかし、今回の「マッサン展」を機会に関連記事を調べていたら、長崎市とアバディーン市が二〇一〇年に「市民友好都市」提携で合意したとの記事を見つけた。「姉妹都市」というほど厳密で公式的なものではなく、緩やかな友好関係を目指したものようだが、何らかの合意に至り半歩でも一步でも前に進むことの方が大事である。私が赴任したのが二〇〇四年であるから六年後に当たるが、私が滞在していた時にはただただある意味「がむしゃら」に日本とスコットランドの歴史的関係を訴えてきたが、それが「市民友好都市」として実を結んだことが自分のことのように嬉しかった。

二、「マッサン展」開催の経緯

外交史料館が「国立公文書館等」の一つにあたることを明確に規定した「公文書管理法」の中で、利用の促進を謳っている第二三條には、国立公文書館等は、「特定歴史公文書等について、展示その他の方法

により積極的に一般の利用に供するよう努めなければならない」と規定されている。また「公文書管理法」の施行に伴って策定された「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドライン」（以下、ガイドライン）では、公文書館等で展示計画を立案するに当たっては、国民の関心や歴史ドラマ等の内容を踏まえて展示のテーマを設定するといった工夫を凝らすようにとの指針が示されている。

外交史料館の所有する外交記録は、幕末以降の比較的新しいものが中心なので、NHKの大河ドラマで採り上げられる時代や人物に因んだ展示をする機会が、これまでほとんどなかった。また、幕末や明治維新をテーマにしたドラマがあつても、直接それを題材とした展示を企画することもなかつた。館長になつて以来私は、出来れば大河ドラマに限らず多くの国民が身近に関心を持つような人物や時代に因んだ展示をやつてみないと考えていた。二〇一三年の秋、飛び込んできたのがNHKの朝ドラで「マッサン」をやるというニュースであった。私の頭の中では、その時点で外交史料館の「マッサン展」のイメージが出来上がつていた。

ここでは、国民的関心を呼んでいるドラマをテーマとして展示することによって、遭遇した問題や課題などを自らの経験を踏まえ、記録に残すこととする。私は、「マッサン展」が成功するためには①NHKの協力、②アサヒビールの協力、③外交史料館が所蔵する政孝関連外交記録の存在が不可欠であると考えていた。③については、第二部で担当官が書くので、ここでは①と②を中心に書くこととしたい。

外交史料館特別展示

マッサン展



琥珀色の夢と青いバラのものがたり

—竹鶴政孝と知られざる

日本・スコットランド交流史—

2014年9月24日(水)~2015年5月8日(金)